

## 名古屋帯寸法についての一考察 (第1報)

### ——胴囲り寸法の定め方——

日野キヨミ\*・高月智志子\*\*・熱田道子\*\*

(昭和56年9月30日受理)

## A Study of the Measurement of Nagoya-Obi (Part 1)

### —How to Standardize the Waistsize—

Kiyomi HIMO, Cishiko TARATSUKI and Machiko ATSUTA

(Received September 30, 1981)

### 緒 言

和服を仕立てる場合、その仕立て上り寸法は従来きもの製作経験により積み重ねてきた寸法を普通寸法として用い、体型により多少の加減をしてきたが、近年は体位向上が著しく、従来の普通寸法では適さない場合が多く、したがって長着の寸法設定では、人体計測、割り出し方法が研究されているが、和服の着装上重要なポイントになる帯の寸法については、適切な方法があらわにされていない。すなわち胴囲り寸法の定め方は、80 cmを胴囲り寸法と定める<sup>1,2)</sup>、乳下の胴囲り採寸<sup>3)</sup>、長着を付けた状態でアンダーバストラインを計る<sup>4)</sup>、着物を着た上から帯の位置を計る<sup>5,6,7,8)</sup>、着物を着て15 cm幅の布、又は紙で計る<sup>9,10)</sup>、などがあるがその根拠があらわでない。

きもの向きの帯結びに適した体型にするには、できるだけふくらみや、くぼみを消してなだらかな筒型にすることがのぞましい<sup>11)</sup>、とされているので、今回は胴囲りをどのように処理し、寸法を定めればよいかを検討したので報告する。

### 実験方法

#### 1 被験者

柳沢等による、工業技術院の体格調査によれば、20才女子胸囲計測結果は平均値 81.8 cm であった<sup>12)</sup>。これを基準とし、これに近いと思われる、本学服飾美術科被服コース2年の学生5名を被験者とした。

#### 2 実験衣および着装

帯は着装最後に用いるものであるため、帯を締められる状態に着装する。それに用いた実験衣および着装順序は表1の通りで、肌着から長着まで普通一般に用いられるものを準備し着装する。尚帯結びの位置は衛生的見地から考えて、乳房を蔽う位置に帯の上部を定めることは、帯揚げがちょうど横隔膜の上を圧迫し、呼吸運動を妨げることになるので好ましくない<sup>13)</sup>。したがって帯の上部はアンダーバストの位置がよいと考えられる。このことによりこの位置を帯幅の上部と定め実験を行う。

着装は、きものコンサルタント・着装士1級所持者の指導による。本実験は昭和55年5月に行ったものである。

#### 3 計測項目

① 計測部位は図1の通り、スリッ着用時のトップバストを①とし、②はアンダーバスト、③は帯幅の下部(アンダーバストより15 cm下の位置)を測定し、これを各被験者の基準とする。

② 図2の通り、裾よけ、肌襦袢、補正用布をつけ上部④から⑤⑥の部位を測定する。

③ 図3の通り、長襦袢、長着を着て、伊達締めをし帯の締められる状態で⑦⑧の部位を測定する。

### 結果および考察

帯結びを美しく、長時間結んでも着くずれしないように、また健康的に装うためには、体型の凹凸をなくし、和服向けのずん胴の型に体型補正を行なうことが重要である。スリッ着用状態から、帯結びのできる状態になるまでの計測値は表2の通りである。

1. スリッ着用状態で計測したトップバスト①とアンダーバスト②との差、帯下部の位置③での差については、図4—①の通りで、①と②の差は被験者Eでは8.5

\* 第3被服構成研究室

\*\* 第1被服構成研究室

表1 着装に使用した材料と着装順序

着装順序	項 目	材 料	厚 さ (mm)
1	裾 よ け	ベンベルグ, 胴新モス付	ベンベルグ0.192 新モス 0.241
2	肌 襦 袢	ガーゼ2枚で製作された市販のもの	0.480
3	補 正 用 布	補正用布…新モスにタオル芯2枚 補 い 布…タオル1枚	3.727 1.989
4	長 襦 袢	絹布綸子単仕立半衿 { ポリエステル 三河木綿	0.277
5	伊 達 締め	絹布紋綸子, 前芯入り	0.928
6	袷 長 着	表…絹布綸子地小紋 裏…羽二重	0.338 0.146
7	伊 達 巻	博多織	0.448
8	帯	帯地…紬地の名古屋帯 芯地…三河木綿35番	0.296 0.371

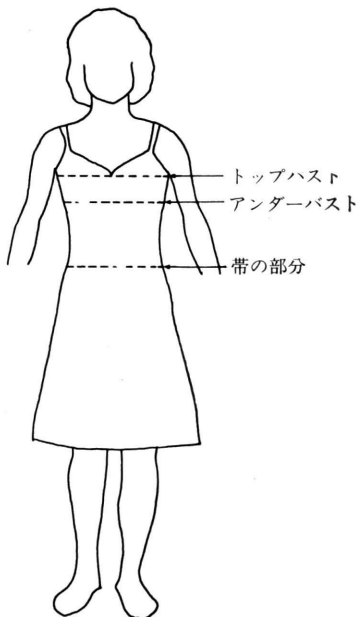


図1 測定部位

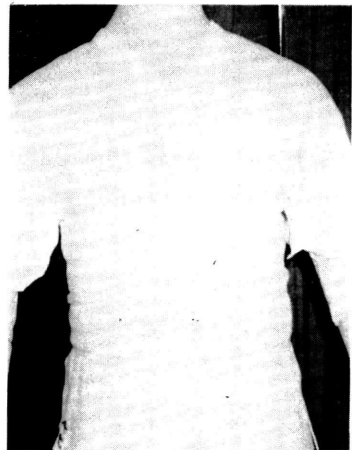


図2 ②の計測状態



図3 ③の計測状態

表2 着装順による各部位の寸法変化

単位(cm)

被験者	計測部位 計測項目	トップバスト ①	アンダーバスト ②	帯の下部 ③
A	①	80.0	70.0	62.5
	②	81.0	78.0	73.0
	③		80.0	79.5
B	①	81.0	70.0	67.0
	②	81.5	78.0	73.0
	③		81.0	80.0
C	①	82.0	73.0	68.0
	②	82.5	78.0	76.5
	③		80.0	80.0
D	①	80.0	70.0	65.0
	②	80.5	77.0	74.0
	③		79.5	78.5
E	①	81.0	72.5	64.0
	②	81.5	77.0	72.0
	③		80.5	80.0

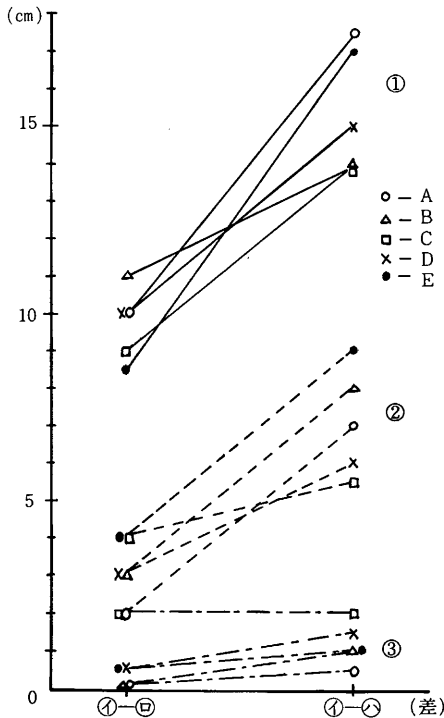


図4 スリップ着用時のトップバスト①を基準に着装順による寸法の変化

- ①: スリップ着用時  
②: 裾よけ, 肌着, 補正用布着用時  
③: 長襦袢, 長着着用時

cm, Cは9cm, A・Dでは10cm, Bは11cmであった。しかし帯の下部③の位置では, B・Cは14cmの差, Dでは15cm, Eでは17cm, Aでは17.5cmの差である。

胴の形態は, いろいろであるが, アンダーバストの位置より帯幅の下部と推定される位置の方が細いものが多く, このままの状態では帯結びを行えば, 下が細いため上から下へ帯のずれが起り, それを防ぐためには帯, 帯揚げを固く締めなければならぬ。このことは着装後に苦しさを感じたり, また着くずれの原因にもなるものである。したがって着装後に着くずれがしないように, 体型を整える。

2. 裾よけ, 肌襦袢, 補正用布をつけた際のトップバストでは, スリップ着用時の計測値より, Aでは1cm増となり, B・C・D・Eにおいてはいずれも0.5cm増となった。これは肌襦袢を着ることにより生じた厚みによる寸法増である。アンダーバスト②においては, ①の場合より補正用布および裾よけ, 肌襦袢などの重なりによる厚みも加わり, A・Bでは8cm増, Dでは7cm, C・Eでは5cm増であった。また帯の下部③においては①の③との比較では, Bで6cm増, Eでは8cm, Cでは8.5cm, Dでは9cm, Aでは10.5cm増であった。②のアンダーバスト②と帯の下部③との比較ではCで1.5cmの差Dでは3cmの差, A・B・Eでは5cmの差である。

スリップ着用時のトップバスト①の④と補正用布をつけたアンダーバストとの比較では, 図4の②の通り, Aで2cm, B・Dで3cm, C・Eで4cmの差となり, 帯下部の位置での①の④と②の③の比較ではCで5.5cm, Dで6cm, Aで7cm, Bで8cm, Eで9cmの差である。

補正することにより, 胴の形態は「ずん胴」の型をとりトップバストとの差が縮小された。

3. 長襦袢, 長着を着し, 伊達締めをしめた状態での計測ではトップバスト④では計測不可能となったが, この部位では帯結びにはかかりはないので, ②, ③の部位での計測を行った。

長着着後のアンダーバスト②において②の②との比較では, A・Cで2cm, Dでは2.5cm, Bで3cm, Eでは3.5cm増になった。また帯の下部③において②との比較では, B・Dで1cmの差, A・Eで0.5cm, Cではその差が0であった。

スリッパ着用時のトップバスト①の④との比較では、図4の③の通り、Cで2cmの差、D・Eで0.5cm、A・Bでは0という結果となった。また①の④と帯の下部⑤との比較では、Cで2cmの差、Dで1.5cm、B・Eで1cmの差となった。

以上の結果から帯を締められる状態にするまでには、下着から上着まで、表1に示した通りいろいろのものを身に纏い、更に身丈の調整は胴で行うなど、いろいろの因子が介在するため、帯の胴回り寸法設定に当たり、スリッパ着用時の状態での寸法を用いることは適切でない。しかし②③のように体型を整えることにより、図4の③の通り、スリッパ着用時のトップバストとほぼ同寸になることが明らかになった。

## 結 び

女性の胴の形態と寸法については、多種多様であるが、着くずれしない、苦痛を伴わないようにくびれた胴に幅広い帯を美しく締めるには、体型を整えなければならない。すなわち体型の補正である。しかし体型には個人差があり、帯の胴回り寸法設定に当っては、体型をずん胴に近いまでに補正し、帯を締められる状態にして採寸し、帯丈の設定を行えば、各人の最も締めやすい帯が製作できるのではないかと考えるが、今回の実験により最も帯結びに適した体型補正を行うならば、トップバストと同寸になることが明らかになった。したがって帯の製作指導に当たり胴回り寸法の設定には容易に採寸できるトップバストをもって帯の胴回り寸法に当てることが考えられる。

尚、体型は一律でないので、補正に用いる材料、小物類は各種あるが、ここでは標準体型を規準にした補正用

布を用いた。

終わりに本研究にあたり、着装被験者となって下さった学生の皆さんに感謝致します。

## 文 献

- 1) 土井幸代：和裁，同文書院（東京），1969，p. 310
- 2) 清水登美，清水とき：現代和裁全書，実用図書刊行会（東京），1975，p. 127
- 3) 奈良女高師裁縫研究会：和裁要義下巻，東洋図書（大阪，東京），1966，p. 7
- 4) 高橋春子，今井和子，他7名：被服構成学，建帛社（東京），1977，p. 113
- 5) 石田はる：和服裁縫独習書，主婦の友社（東京），1968，p. 275
- 6) 岩松マス：和裁全書，主婦の友社（東京），1968，p. 275
- 7) 成田 順，石田アイ：和裁研究，同文書院（東京），1974，p. 93
- 8) 共立女子大学編：和服裁縫全書，大日本図書（東京），1966，p. 144
- 9) 松井和哥：和裁図鑑，暁教育図書（東京），1974，p. 161
- 10) 越堀すみ：和裁と和装，婦人生活社（東京），1968，p. 194
- 11) 清水とき：きものの着付講座第2巻街着，東京服装学園（東京），1976，p. 47
- 12) 柳沢澄子：被服構成学，光生館（東京），1975，p. 24
- 13) 左司 光：被服衛生概論，光生館（東京），1966，p. 98